

『東トルキスタン共和国研究』

——中国のイスラムと民族問題——』

(王柯著 東京大学出版会 1995年 299ページ)

こまつ ひさお
小松 久男

昨年夏カザフスタンの首都アルマトゥを訪問したときのこと、私は思ってもみない所で「東トルキスタン統一民族解放戦線」の青年たちに出会った。彼らは中央アジア諸国のソ連からの独立に触発されながら、中国領内にある東トルキスタン(新疆ウイグル自治区)の独立の希望を性急な調子で語っていたことを覚えている。そして今年1996年、いくつかの報道によれば、カシュガルをはじめとする新疆の各地で分離独立派の活動が続発しているという。現代新疆の民族問題は緊張をはらんでおり、予断を許すものではない。それはまたこの地域の近現代史へのわれわれの関心をかきたてずにはおかない。本書は、このような東トルキスタン現代史に関する最新の研究成果のひとつである。

本書は、短命とはいえ(1944年11月から1946年6月)新疆北部にこの地のトルコ系ムスリムの政権として成立・存続した東トルキスタン共和国の政治過程を中心にすえ、1920年代から40年代末までの東トルキスタン民族独立運動の展開と性格を明らかにしようとした意欲作である。用いられた史料の中で注目されるのは、著者が共和国関係者から行った聞き取りと共和国指導者の残した未公開の文書史料であり、さらに当事者たちの中国語・ウイグル語・カザフ語などによる日記や回想録が豊富に利用されている。

全部で9章からなる本書の内容を簡単に紹介すると、まず最初の3章は運動の歴史的な背景の説明にあてられている。1930年代前半に新疆南部で展開された第一次独立運動に関する記述は簡略であるが(新しい研究として、新免康「『東トルキスタン共和国』(1933~34年)に関する一考察」『アジア・アフリカ言語文化研究』第46・47号 1994年がある)、やがて第二次独立運動の要因となった盛世才の統治政策(1933年4月~44年8月)には詳しい考察が加

えられ、その民族政策の「安撫策」から「鎮圧策」への転換が、ソ連の対新疆政策との関連で解明されている。

本論にあたる以下の章は、ソ連に支援されたトルコ系ムスリムの独立運動の展開を克明にたどり、とりわけ共和国指導部の二重構造(ウラマーなどの伝統的なムスリム知識人と近代的な教育を受けたアブドクリム・アバソフら親ソ派の青年知識人)、政治指導および軍事行動におけるソ連の積極的な関与と支援、そして共和国政府の実情について見事な分析が行われている。このあたりは、ときに西トルキスタンのブハラ共和国(1920~24年)の事例を想起させる。しかし第2次世界大戦の終結とともに、中国への懐柔工作を必要としたソ連が東トルキスタン共和国への支援を取り下げた結果、共和国は国民政府との和平交渉に入らざるをえず、内部闘争をくりひろげながら、ついには消滅を余儀なくされたのである。この間、アバソフらが毛沢東の新民主主義革命論を参考にしながら結成したという「東トルキスタン革命党」に関する記述も、新たな事実の発掘という意味で興味深い。最後の節で著者は、現代新疆の民族問題を指摘しながら、短命とはいえ確かに実在した東トルキスタン共和国の歴史的な意義を確認している。

全体として、本書は広い意味での中央アジア地域研究への新しい貢献として評価することができる。次の課題のひとつはソ連側関係資料の調査と分析であろう。それは著者が指摘したソ連ファクターの重要性をさらに裏づけるのみならず、中ソ国境を越えて運動を展開したムスリム活動家たちの実像を明らかにするかもしれない。注文をつけるならば、先行研究にはより丁寧な整理が求められ、それらと著者の研究との相違を明示してほしかった。ウイグル語などの表記における若干の誤りは惜しまれる。私としては、同時代の新疆南部の動向をもっと知りたいと思ったが、史料はないのだろうか。いずれにせよ、本書をはじめ最近の日本における東トルキスタン近現代史研究は、世界の中でも例をみないほどに厚みを増してきている。今後のさらなる進展を祈りつつ、紹介の文を終えることにしたい。

(東京大学大学院人文社会系研究科教授)